

イスラエル・パレスチナの柔道選手訪日について

東海大学体育学部武道学科4年 釘崎 強至

今回この活動に参加させてもらい、私自身の視野を広げることができたと思います。それと同時に国や宗教で隔たりがあってもお互いに理解しあって仲良くすることは不可能ではないと感じました。

今回様々なことがありましたが、その中でも特に印象に残っていることがあります。大会当日、試合が始まる直前にイスラエル、パレスチナ双方のある子達が言葉を交わし握手をしていたことです。それまであまり話しているところを見たことがなかったので驚きました。日本に来た当初は相手側をテロリストと呼んだりしてとても不安でした。でも彼らのこういった行動をみると、私達が見てないところで少なからず会話を交わし交流をしていたと思います。人間同士の関わりに国境や宗教、思想は関係ないと感じました。

また、ある記者がインタビューで「こういった活動でイスラエルとパレスチナの関係が良くなると思いますか。」という質問をしていました。中学生に対してこんな質問をするのはどうかと思います。しかし子供達は「畳の上に立って組みあえば、そんなの関係ありません。」と答えていました。私自身イスラエルとパレスチナの問題はとても難しいと認知しています。彼らも同じように考えていると思います。でも彼らは彼らなりに何とかしようという気持ちはあって、柔道を通じて仲良くしていけると考えている。だからこそそういうことが言えると私は思います。そう考えると私は嬉しくなりました。

今回彼らから様々なことを学びましたが、一番大きいのは「繋がり」の大切さだと思います。イスラエルとパレスチナという難しい間柄であっても繋がりを持つことができ、それがまたどこかで別の人を巻き込んで繋がっていく。関係が改善されるのは簡単ではないけど、この小さな繋がりが大きくなって少しでも良くなっていく為の力になってほしいと願っています。そしてこの期間に様々な人達から支援や応援をいただいたことにとっても感謝しています。私自身もここで培うことができた繋がりを大切にしたいです。

